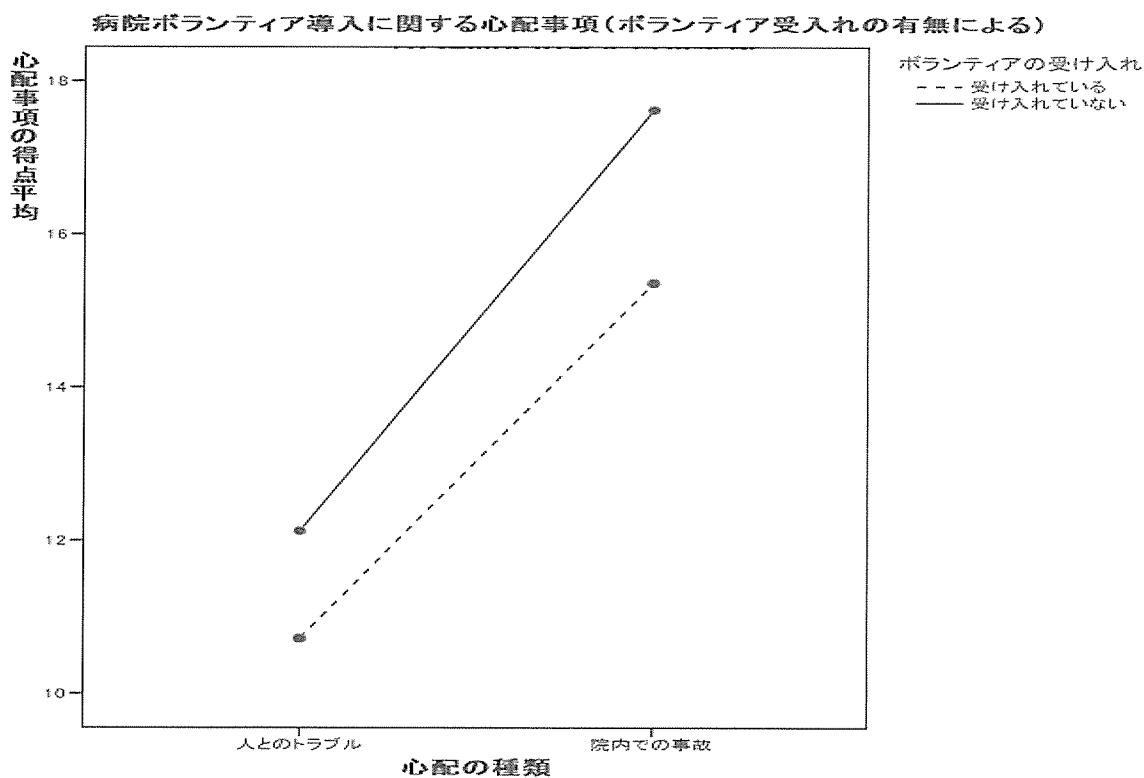


フの負担の軽減」、「医療スタッフの負担の軽減」などで負荷が高く、「労働力としてのボランティアへの期待」に関する因子とした。

### 3-19 ボランティア導入をしていない病院の方が受け入れへの心配が大きい

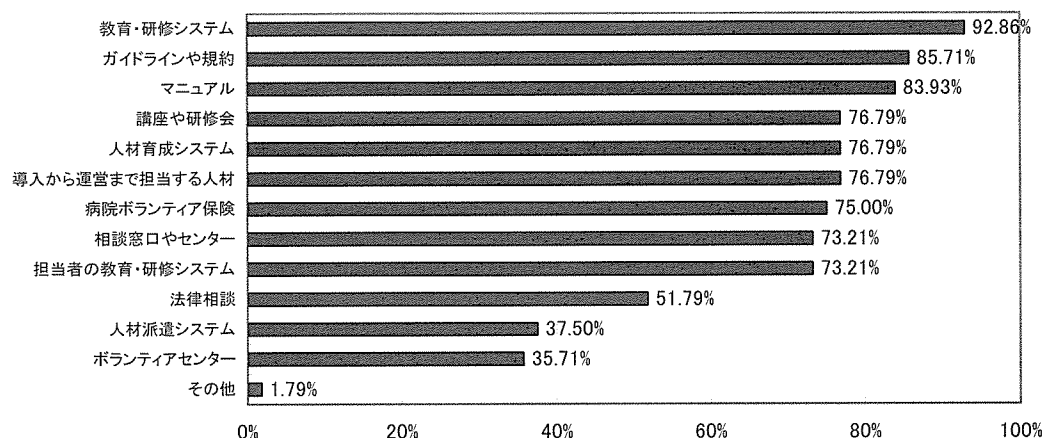
ボランティアを実際に導入している病院と、していない病院の間には、病院がボランティア受け入れに対し感じている不安や心配の程度が異なるのではないだろうかと考え、独立変数を、「ボランティア受け入れの有無」、「ボランティア受け入れへの心配事項の種類」、従属変数を「心配事項の合計得点」として、2要因の分散分析を行った。その際、「ボランティア受け入れへの心配事項の種類」は問13の8項目のうち、「患者とのトラブル」、「職員とのトラブル」、「ボランティア相互のトラブル」の3項目を「人とのトラブル」に関する項目としてまとめ、「感染症」、「院内での事故」、「個人情報の保護上のトラブル」、「病院に関する情報の漏洩」の4項目を「院内での事故」に関する項目としてまとめた。また、「心配事項の合計得点」は、「人とのトラブル」に該当する3項目の合計得点として算出し、「非常に心配している」を5点・「少し心配している」を4点・「どちらともいえない」を3点・「あまり心配していない」を2点、全く心配していないを1点)、その合計得点を人とのトラブルにおける心配事項の得点とした。院内での事故における心配事項の得点も同様にして算出した。その結果、ボランティア受け入れの有無と、ボランティア受け入れへの心配事項の種類との間には有意な差が見られた ( $F(3,57)=69.098, p<.01$ )。

また、図○はそれぞれの平均値をプロットしたものである。この図から、心配の種類に関わらず、ボランティア受け入れを行っていない病院の方が心配事項の得点が高いことがわかった。かつ、心配事項の種類に関しては、ボランティア受け入れの有無に関わらず、院内での事故の方が人とのトラブルよりも不安に感じていることが明らかとなった。



### 3-20 教育・研修システム、ボランティア導入ガイドライン・マニュアルの必要性

ボランティアの導入にあたり必要なものについて (N=56)



ボランティアの導入にあたり必要なものについて多重回答で答えてもらった結果を図 19 に示す。全 13 項目のうち実に 9 項目について 70%を超える結果となった。中でも、「ボランティアの教育・研修システム」が 92.86%と最も高く、ついで「ボランティア導入のガイドラインや規約」が 85.71%、「ボランティア導入のマニュアル」が 83.93%という結果になった。ボランティア導入にあたり必要性が特に高かった、ボランティア導入のマニュアル・ガイドラインの作成、ボランティアの教育・研修システム作りが今後進むことにより、病院がボランティアより導入しやすくなると考えられる。

## 4章 病院ボランティア—その東アジア風土における定着・拡大の実態

### 4-1 喜縁（ヒヨン）医療財団

釜山市から南に車で1時間ほどの慶尚南道に、計画工業都市であるチャウォン市がある。この街の中心街に、喜びを結ぶという意味で喜縁（ヒヨン）と名づけられた病院がある。この医療施設は工業団地の中にある9階建て雑居ビルの4階と5階の二つのフロアに開設されている。ビルの地下は3階まで駐車場になっており、エレベーターには買い物客と患者が入り乱れて乗っている。4階のエレベーターを降りると、そこは病院正面玄関である。この医療機関のテーマカラーであるピンクと白で彩られた入り口には観葉植物や小さな噴水などがあり、明るい雰囲気漂わせている。右手には長い外来の受付のカウンターが、左手にはボランティア控え室があり、その隣にはカラフルなタオルなどの並ぶ売店が、少し奥にはパン屋がある。ここを通り抜けた奥が120床の病室になっている。病院入り口にパン屋を入れたのは、患者さんが病院に入ってきたとき、焼きたてのパンのにおいがすると不安感を持たず生活の続きを感じるのではないかという理事長の独自の考えだそう。入り口直ぐ左手のボランティア控え室には、訪問時も10名近い婦人達が賑やかに着替えなどをしていた。部屋のドアはなく、廊下に開かれた空間となっている。その20畳程度の場所にボランティアのためのロッカーなどがある。奥にはデスクがあり、ボランティア・コーディネーターの事務作業やボランティアの出勤簿を管理する。手前にはテーブルがあり、ボランティアのための御茶や飲み物が用意されている。

院内は明るく、廊下には歩行浴用の水路や観葉植物、観賞魚の水槽などが置かれ、快適な空間となっている。黄色いベストを身に付けたボランティアがあちらこちらにおり、掃除をするもの、患者の身の回りの世話をするもの、点滴中の認知症の患者の抑制を手伝うものいる。給食のボランティアもおり、大きな鍋を引いているボランティアもいる。給食は院内だけでなく、周辺の貧困街や独居老人のところに配ることも行っているそう。驚いたことにICUの中にもボランティアがおり、患者の爪を切ったり身体を拭いたりしていた。男性ボランティアも散見された。ICUに入ることの出来るボランティアは主に看護学生や医学部の学生などある程度の知識や訓練を受けている特別な者だそう。浴室と更衣場では10名近いボランティアたちが大変賑やかな笑い声をたてており、入浴介助をしているのだと言う。

さっき控え室にいたボランティアたちとは別のボランティアたちで、一日50~60名のボランティアが活動しているという。

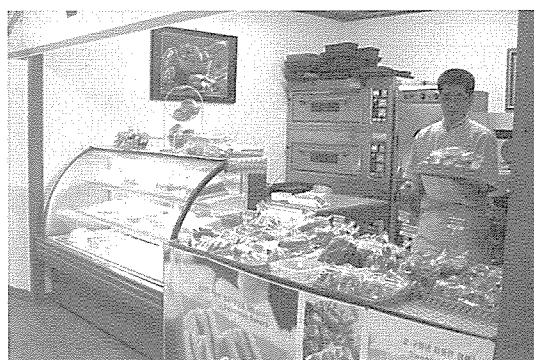
5階はフロアの4分の1程度の広さがリハビリセンターで他の店舗や空きスペースもある。ここでは、在院患者数230人くらい。外来は一日170名を対象にリハビリテーションを提供しており、一日も早く退院できるように努力しているという。理学療法士11名、作業3名で運営。ボランティアを入れたいが、専門的知識のある人がいない。病床は120床。女性5036名。



日本の病院と2年前から友好関係を持っている



売店



売店(上)とパン屋(下)



ボランティア控え室：ドアがなく開放的

ボランティアは黄色いベストを着る

## 施設代表、ボランティア担当者からの説明

学生は休みのとき、6時間のボランティア経験が必要で、この医療機関はこうしたボランティア活動認定センターになっている。

入浴介助には29団体が登録しており、在院患者、在宅患者の入浴を週に2回は必ず行えるようにしている。無料給食も提供しており、独居老人のための配食も行っている。配食は登録団体が1ヶ月間に順番でやっている。理美容は6団体が登録、在院患者にもあるが、家庭訪問をして行っているところもある。団体によって違うが、月1回～週1回程度行っている。

宗教ボランティアも6団体あり、各種宗教が在院患者のために対応している。キリスト教や仏教などほとんどの宗教に対応できている。患者の間に大変人気があり、毎週来てもらい説教を聴いたり、話を聞いてもらったりしている。自分の信じている宗教に応じて対応しているので、無理な勧誘はない。

院内だけではなく、在宅患者に対してホームヘルパーも提供している。家庭訪問をし、家事手伝いや相談に乗ったり、話し相手をしている。その他のボランティア活動としては、食事の介助や趣味の手伝い、生活治療専門の人、在院患者のためのプログラム、各種専門家の受け入れ、「社会奉仕」(犯罪者更正のためのボランティア活動)、「学生奉仕」(義務としてのボランティア)の受け入れも行っている。いずれも慶尚南道地域でNo.1の受入数を誇っている。特殊な「学生奉仕」として、積極的に問題のある学生を受け入れて指導更正の手伝いもしているという。

理事長の考え方として、男性は20歳から2年間の兵役があるが、女性はないので、女性はその間少なくとも2~3ヶ月以上ボランティアをすればよいのではと考えているそうだ。

公演活動も月に1回実施している。患者の誕生日などに、近隣の幼稚園、公私大学などの人が来る。こうした公演活動も、はじめは病院負担だったが、2004年からは大韓生命保険会社が費用を負担している。この会社とは姉妹関係にあり、新入社員の教育や社員教育のために入浴介助のボランティアをさせている。高齢者の入浴介助を、企業に勤めている父親と子供あるいは孫とのペアでさせている。この活動は、核家族化する韓国において高齢者を敬う気持ちを育てるといった教育的な意味が強いと考えている。

学生とは食事介助などやりたいことを話し合いで決めている。10代20代が多く、老人に対する尊敬、親孝行などについて考える機会を与え教育的な効果を狙っている。活動をするうちに身内でない高齢者に自分の相談が出来るなど、高齢者にとっても若者にとってもよい相乗効果が出ている。学生には受け入れに関して30分程度の教育をしてから、主に患者の話し相手や車椅子介助、食事介助をさせている。入浴は事故防止のため青年ボランティアにさせている。

公演のプログラムとしては、時間ごとに違うことを計画している。折り紙や音楽、ゲームなどである。病院のロビーで室内ゲームをしたり、ボーリングをすることもある。外来患者が途絶える夕方5時40分以降、ストレッチングなども行っている。

全国でも第5位のボランティア受け入れを達成しており、よい広報になっている。血縁関係を持つ人や宗教、仏教団体などや地域、高校、軍隊などに広報している。企業連携も行っており、企業職員もボランティア点数あとの評価があるので、その受け入れをしている。企業はこちらから提携を頼むことも、企業から依頼されることもある。STS、大韓生命、大中、釜山中小企業などを受け入れている。地域との連携として、宗教、ボランティア団体とも連携している。

その他広報としてはチャオン州の広報紙や、新聞、地元の放送局に依頼するが、全部無料でやってくれるところを利用している。

ボランティアの管理としては、態度や考え方、ハンドマッサージ、体操など開始前に徹底的な教育を行う。老人の相手をしたことがない人には、老人に接するときには便利なのでハンドマッサージのテクニックを教えている。この技術を教えると、家に帰って親のためにやるようになるのでこれも教育的意味がある。核家族化の中で、親孝行を忘れかけている若い人が改めて家族と密接に接することができるようになるという。

レインボー体操というのがあり、(日本で考案されたようだ)認知症の予防や脳の刺激、筋肉トレーニングになるという。無気力な人に興味を起こさせ、老人が楽しめるようなプログラムである。この体操はボランティア活動や在宅でも幅広く活用している。ボランティアは実費でくるのでその代わりに体操やマッサージ技術など各種のトレーニングを提供している。

学生が多いので、活動終了後には感想文を書かせている。優秀なものは病院のHPに掲載したり、家族や学校に送っている。活動の中で気づいたことを書いてもらい、親に子供の考え方をつたえることもできる。核家族化の中で老人に接する機会が減っており、当初老人に接すると驚いたり、泣いたりするボランティアもいるそうだ。活動でよい子になるよう激励している。書きたくないという子もいるが、習慣にするとよいので、必ず全員に書かせている。

社会奉仕の日、老人の日、大学進学時の推薦状などで賞をあげたりすることもある。ボランティアを徹底的に管理し入力するデータベースシステムを作っている。活動実施時間で管理し、自分が何年、何時間活動しているのか情報が蓄積されすぐわかるようになっている。開拓、扶養、ボランティアの日に行事に参加し、診療や健康情報の提供も行っている。この医療機関への所属感を与えるためにこうした様々な褒賞を工夫している。定期的集会も行う。活動分野別に懇談会を行い、講義や年間行事の話し合いをしている。

活動は団体ごとに登録。それぞれの団体に特徴がある。学生ボランティア団体どうして話し合っただけで担当を決めている。全体の会議は年に1回。部署ごとに責任者と施設側が参加。報告や公示事項の連絡が主な議題であるが、公演会の準備なども行う。新人ボランティアの教育は施設職員が全面的に行う。リスクマネジメントとしては、個人情報のことは大まかに説明している。他の施設では入浴時に骨折などがあつたそうだが、当施設では起きていない。もし事故になった場合は病院が全責任を持つのが当たり前。一人当たり8名でチームを作って入浴介助を行っている。具体的な介助の方法は日本で研修したそう。日本の介護技術はすぐれており、積極的に取り入れて学びたいという。

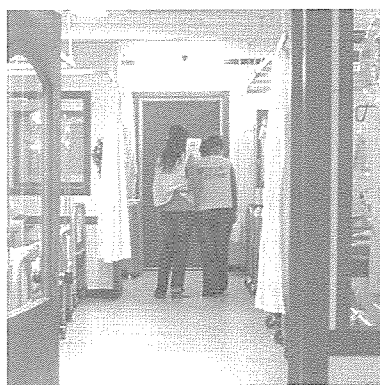
仕事をしながら自然発生的にこのようなシステムになった。特に手本にしたことはない。基本的な考え方として、もらったらあげよう。自分の子供のように、親のように接する。年間の予算は500万ウォン（約600万円）少ないが仕方ない。年間の行事、懇親会、ボランティアに贈呈する花代などに使っている。ボランティア担当者は1名。（残念ながら、訪問時は日本に出張中でお話は聞けなかった。）

韓国では、ボランティアに関して学生奉仕、社会奉仕と分類されており、自願奉仕と言ういわゆるボランティアと、学生の義務としての奉仕活動、犯罪者の更正のための奉仕活動は別と捉えられている。ヒエン医療財団ではその両者の受け入れを行っており、その両者に対して教育的成果を挙げているという。犯罪者の受け入れに当たっても、特に気負うことなく普通の人間として受け入れているが、ボランティア活動をするうちに笑顔がでてきてよい人間になっていくという。きちんと仕事をしないことについては注意もするし、服装や礼儀、態度などについても社会人としての常識的な部分を求めている。ただ、これまで二人くらいは受け入れた後も態度が変わらなかつたので途中で活動を中止させたことがあるそう。また、学生に関しても同様で、やる気のない場合は注意をしている。教育的効果がない場合は、止めてもらうこともあるそう。

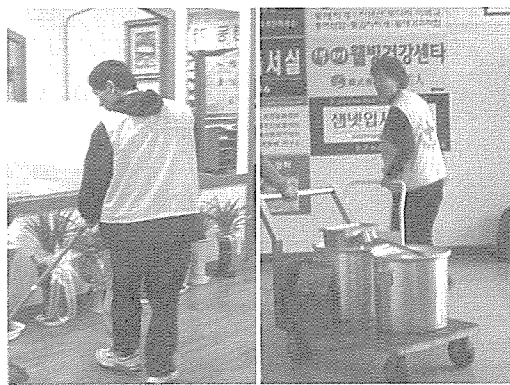
ボランティア規約をつくり、活動開始前にボランティアが手元に持てるように小さなカードにしている。学生ボランティアのためにはチェックリストも用意している。規則カードをもって、いつでも参照してもらえるようにしている。受け入れに当たって検診は行っていない。ICUにもボランティアは入っているが、教育を受けた人だけで一般学生ボランティアは受け入れていない。

アメリカからの留学生をボランティアとして受け入れたこともあるが、アメリカではボランティアをするのに検診やバックグラウンドチェックなどハードルが高いが、ここでは気安く出来ると喜ばれたそう。

昔は3世代で暮らしていたので、年長者を敬うことが自然に身についていたが、最近は韓国でも核家族化が進んでいるのでこのような施設での高齢者との触れ合いを通じて敬老精神の教育を学生に与えることで、精神的な健康を提供することになると、理事長は述べた。



ICUの奥で心配そうに患者を覗き込んでいる



掃除・給食の手伝いをするボランティア

## ボランティアのための課題

### モチベーションの誘発

社会的欲求を充足するようなプログラムの提供。無駄遣いではなく、よいことに使われるため努力し、さらに開発する。

### ボランティア活動能力を上げる施策

興味、技術を発揮させる。利用の質、入浴介助。単純なことではなくて、そのための教育プログラムを提供し、トレーニング後実施させる。インセンティブの提供。

ボランティア活動を10時間するとその代わりに自分が10時間受けることができる「ブンマシセド」という地域通貨があり、社会福祉協議会や老人社会において協力していくための制度である。キョンギ市と提携しておりマイレージ制である。点数をためると、各種文化生活のための減免、スポーツ、文化施設の入場料の減免などを行っている。ボランティア活動でも点数をつけることができるので、マイレージをためるために来る人もいる。

### ボランティア機会の保障

参加に応じて配置し最大限の効果を生じるようにする。

## ボランティア会長にインタビュー

ボランティア活動開始して6年目。ボランティア代表となって6年目。もともと看護師の資格を取るための勉強会の仲間が資格取得後に力を生かすため、当施設で入浴介助を開始した。1週間に2回。15～6人が参加し、同様の人数の入浴介助洗ったり、着替えさせたりしている。全てボランティアのみで行っている。このグループは全員介護士の資格があるので、施設側も安心して任せている。ボランティアをしたいという気持ちと、勉強の結果を生かしたい気持ちが両立している。資格を活かして仕事として行うには時間的に家庭との両立が難しいので現在は断念している。しかし、家族が独り立ちしたら仕事としてやっていきたい気持ちもある。ここの施設は、雰囲気も施設もいいので活動は“中毒”になった。ここでボランティアをすることは誇りである。老人と仲良くできるのがよい。ボランティアをするとうれしくなる。笑顔が出て、仲良くなる。やりたくないと思っても馴染みの老人と離れるとまた会いたくなる。情熱を持って活動できる。困ったことは特にない。ヒョンというのは縁が結ばれるという意味であり、場所的にも便利なので大変満足している。

理想に燃える理事長のもとで、この医療機関は患者中心の視点を持ち、さらにボランティアに対してもボランティアの利益、患者の利益、ボランティアされる側の利益を満たす方法を模索した結果現在の方式になってきたという。この医療機関は以前広大な土地を入手し底での老人施設を運営したが、土地価格が大きすぎたため一度は経営破たんしたそう。その後、このショッピングビルのど真ん中に入ることで、経営は持ち直したという。こうした経緯からも現実的には人件費抑制のためにもボランティア受け入れであったかもしれないが、ボランティアに中毒になると言わしめるだけの有意義な活動を提供できているということは、本当に素晴らしいと感じた。リスクマネジメントに関しては、韓国の国民性か社会文化的背景のためか未だ厳しくないため、むしろボランティアは職員とほぼ同列で協働することが可能になっているようだ。

## 4-2 釜山大学病院

釜山大学病院でのボランティアは患者サービスの拡大、地域社会の方の参与意識を上げることを目的としているが、現実的には人手不足の補充という意味もある。人的資源の有効活用とともに、病院のイメージを上げることができるという。

### ボランティア活動の歴史

90年代、カソリック系宗教団体からボランティアの申し出があった。布教活動など宗教的ニーズに対応することから始まり、患者の話を聞くことや、患者や家族の安心のための活動に広がり、98年9月14日にボランティアを正式に受け入れることを公約した。

現在のボランティア活動としては、申込書の代筆、中央資材室での消耗品の整理、薬剤部で薬をパッケージからはずす補助作業や、医療記録の製本・整理作業、心電図室での受付、外来での案内、移動図書サービス、(貸し出し、管理)、患者の食事の介助など病棟での補助など広範な活動を行っている。ホスピス病棟では、人間の尊厳を大切にすることのケアをボランティアが担っているという。

当院でのボランティアは、主に40代から60代の主婦が最も多く、平均して週1回3時間程度活動している。各人が決まった週、決まった日にきて、特定の活動を続けている。

現在300名の登録があり、一日平均50名が活動している。1998年には登録人数250名で活動延べ人数は年間2399名、活動時間総計は5890時間であった。2006年は300名の登録で、年間延べ人数12114名、活動時間総計は30288時間となっている。

社会事業部の中にボランティア活動があり、その他の活動としては相談業務、支援業務を行っている。社会事業部の年間予算4千万ウォンであり(約500万円)ボランティアから受ける恩恵のことを考えるとこれでも少ないと思っている。ボランティアの食事に2千万ウォン、お茶、水、などに300万ウォン、団体、産業視察庁から交通費400万ウォン、新規ボランティアの教育費などがその他の支出となる。ボランティアに対しては、病院での診察費の減免なども行っており、それも計上されている。ボランティアに対してはインフルエンザの予防接種代の支援もしている。

98年ボランティア導入当初の予算は900万ウォンであったが、近年増加している。ボランティアの方達が1年間働いている時間で換算すれば13人分くらいの仕事をしていることになり、これが2人分の給与でできるのだから、よいことだと思うと担当者はいう。さらに重要なのは、経営者から見るとボランティア活動の結果、従業員がボランティアに感謝の念を持つようになり、職員の離職を防ぐことにもなるという。

毎年2、3月に新規募集を行っている、方法としては、病院側が地域のアパートや住宅にポスティングしたり、仏教、キリスト教、カソリック教などの各教会にチラシを置いたり、依頼を行っている。また、地方紙の社会面でボランティアが活動しているところを取材させ記事として掲載してもらったり、地元のフリーペーパーに募集広告を載せたりしているという。しかし、最も長続きするのは、現在活動中のボランティアからの推薦で入ってきた人である。

応募してきたボランティアは担当のMSWとボランティア代表の二人で面接して、病院の希望とボランティアの活動内容に関する希望が合致すれば受け入れている。実際の活動開始までは、平均1~2週間待機してもらい、連絡し活動を開始してもらう。ボランティアの資質に欠ける人であると判断する場合は面接で断っているが、たまにはそういう人がいるという。受け入れにあたって特に健康診断などは



していない。ボランティア活動の出来る人は原則として健康であると考えている。

ボランティア保険はあるが、1年以上の活動実績のある人でなければ加入できない仕組みになっているので、2年目以降加入する。これは韓国厚生省のボランティアセンターで提供されるボランティア認定プログラムを受けたボランティアが加入でき、認定された団体への登録で加入可能となる。釜山大学病院のボランティアはこの保険に登録される。

釜山の医療機関ではMSWがボランティアの担当になることが多いが、ボランティア・コーディネーターとしてSWの資格が必須というわけではない。むしろ宗教機関で働いている人で女性の担当者の方が多いだろう。普段のSWの仕事としては、日本と大差なく、医療以外の問題解決や金銭的問題、保護者のない人や治療意欲の低い人などの対応を行っている。

病院自体は、地域に対して医療ボランティアとして、社会福祉施設で無料検診を行ったり貧困者地域での無料検診などを提供している。



### ボランティア代表にインタビュー

ボランティア代表の会長は90年当初より活動している方で、外来案内の活動をしていた。94年に病院が特別法人化したことをきっかけに正式なボランティア代表となり、現在はボランティアの管理業務に専念しているという。活動当初は天主様の言葉を伝える、患者の話を聞くなど宗教的活動であったが、その後4年間でボランティアが増えてきたこともあり、患者に新聞配りをするなどといった具体的な活動を始めたようだ。さらに外来案内、図書、中央資料室、薬剤部、宗教部で活動開始し、95年にはホスピスができたので、そこでの活動もはじめている。また、98年からさらにその他の活動も始め現在では先に述べたような多様な活動が行われている。

ボランティア活動のきっかけは、宗教活動の一環であり、カソリックセンターで数ヶ月間の教育を受けて、活動を開始した。活動場所は特に考えていなかったが、主長様が病院で活動していたので、誘われてここで活動するようになった。自分なりに活動を考えてやっているが、家にじっとしているより楽しいし、人の役に立っているのがうれしい。大学病院は国が運営しているのでここで活動する事は国に協力することと同じだと思っているし、病院の対応に関しては満足している。

病院とボランティアの意見交換として、毎月第3月曜に会議を行っている。問題点を出し合いそこで解決している。この会議は98年9月より開始している。会議には指導教授と担当SW、ボランティア会長、一般ボランティアの方、さらに院長が参加している。毎年長く活動している人には、院長が賞状と景品でねぎらっている。

これまで、ボランティア活動の中で大きな問題はないが、かつて30代の若い女性が高齢ボランティアを排除しようとし、ボランティアは若い人がやるべきだと大騒ぎしたことがあるという。以後若い人をボランティアに受け入れることに関して代表は積極的ではないようだ。時に個人的問題でハプニング

が起こることがあるが、大きな問題にはなっていない。高齢化し自分の健康状態が悪くてやめていく人が多いという。トラブルに関する質問には、あまり話したくないのか、口が堅いようであった。

副会長は現在中央資材室に入って活動しているという。自分なりに楽しんで、よいことをしていると思っているが、周りの人からは「大変なことをしているね」と言われるそうだ。釜山市内のほとんどの病院にボランティアが入っているし、昼ごはんの介助もしている。同じ活動を長い間続けている。色々と病院が負担してくれるので、健康である限り続けたいと思っている。

## ボランティアの面接

健康状態によっては断ることもあるので、55歳以上の人には必ず聞くことにしている。66歳以上でも部署によってはOKすることもある。基本的に活動日や体力的に希望する活動と合わない判断するときは断る。活動時間は月曜から金曜までの午前9時から12時と13時から16時半まで。休日はボランティアの活動受け入れはしていない。

ボランティアと職員の違いは「社会的雰囲気」である。ボランティアは自分の都合でできる。当初交通費、食費などは自分で負担していた。職員の理解がないときは仕事がなかった。食事が出るようになったが、ボランティアを助けすぎだという声も出ているそうだ。最近では患者家族の理解がなくなっただとも言われたが、具体的なことは話してくれなかった。ボランティアは時間を区切った社会奉仕であり、主婦が多いためか、ボランティアの家族が不満に思わない程度の活動時間にすることが大切だという。毎年30名くらい新規ボランティアが入ってくるが、健康上の理由などでやめていく人も30名くらいおり、急速にボランティアが増えるということはない。しかし去年は50名入ってきたそうだ。また、最低2時間の学生奉仕の得点を得るためであるが、1日3時間、1週間の活動で1年に70名くらいの学生がボランティアに来る。夏休みには中高生もやってくる。彼らは車椅子の補助などを行う。学生らボランティアの指導や直接の管理は病棟の看護師がやっている。30代の若いボランティアもたまにくるが続かないという。

現在困っていることとしては、SWと2人で管理しているが、1日の活動者が多く、人数的に大変なので、今はボランティア代表と分担して事務作業をしている。民間病院やサンセイ、ヒュンデ病院などさらに大規模にボランティアを受け入れているところでは、専属のボランティア室でボランティア管理を2~3人でやっているところもある。

## ボランティアの存在価値

担当教授から見ると、ボランティアがいることは広報になる。病院のブランド価値、ネームバリューが上がるので、ボランティアに対してよくしている。人件費削減のためであるが、それだけではない。現在韓国には、病院機能評価として公式なものではなく、人数の確認程度である。病院業務のかなり広範な部分にボランティアが活用されており、むしろ日本のボランティアより広い活動範囲で、患者に直接接する業務から、病院の資料整理などほぼ職員に匹敵するような活動を行っている。ボランティアのバックグラウンドとして、宗教的色合いが濃いようで、そうした人たちを病院も信頼するという方向でボランティアを見ている。ボランティアの起こす事故などリスクに関しては余り心配していないようだ。ただし、ボランティアの選抜については、アメリカの病院と同様、二人以上で面接し資質がないと感じられた人に関しては断るようになっていた。

このSWは、韓国ボランティア協会の認定するボランティア管理士の認定を受けている人で、アメリ

カ型のボランティア・マネージメントを身に着けており、その発想はまさにアメリカと同様であった。この方は、ボランティア協会のボランティア管理士認定コースの講師としても活躍していることを韓国ボランティア・アカデミーで知った。韓国ではアメリカ型のボランティア観やボランティア・マネージメントが根付いているが、リスクマネージメントに関してはアメリカほど厳しくしすぎないことで、お互いの信頼を深めているようである。

ボランティア代表の方も宗教的背景からの活動開始であり、若干宗教観の違いがときに宗派間の争いになることも懸念された。年代の差であるのか、宗教観の違いであるのか、30代の若い女性ボランティアに関して、やや拒否的な感覚を持っておられるのを感じた。

実際その後、別の病院経営関係者から聴いたところでは、韓国の病院ボランティアは宗教的背景もっている人が多いため、時に宗派間の争いになることがあり、病院として対応に困ることがあると打ち明けてくれた。

宗教的背景のある方は、ボランティアとして人のために役に立つことに関して強い信念があるので、患者に害になることは行わないであろう信頼に足る人たちであると同時に、その信念に触れる問題になると、対立関係解決の糸口が見つからないことも考えられた。

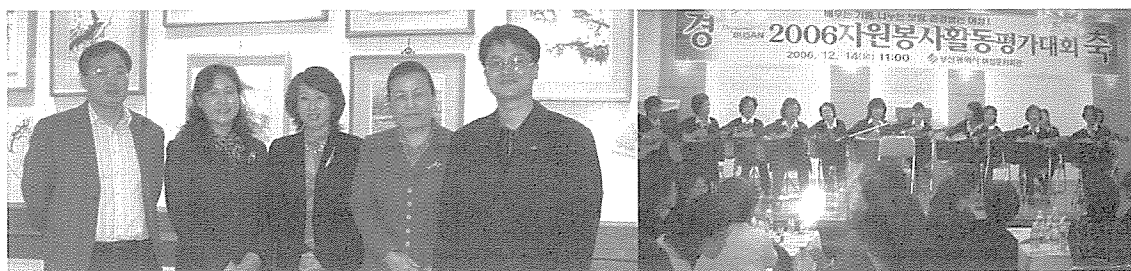
韓国では宗教が盛んであり、プロテスタントの信者が多いそうだが、釜山大学病院では主にカソリックの方が活動しているようだった。こうした宗教的背景から導入された病院ボランティアのあり方は、ある意味で日本の病院ボランティアの歴史と似ているところもある。

### 4-3 釜山広域市女性文化会館

ここは市の事業として職員20名、非契約職員5名で釜山市の女性を対象に、主に様々な教育プログラムを提供している。福岡市における女性センター「アミカス」とも連携を取っている。主な教育内容としては、韓国の伝統文化を生かすためにカイヤクムという楽器の演奏や、舞踏、パンソリなどの伝統演芸や、外国語、スポーツ、伝統料理、調理などを週2回、2時間3ヶ月終了のプログラムを月1万ウォンという比較的安価で提供しており、一日あたり800名～1000名の利用がある。市からの全体の予算は年間17億ウォンであり、財政自立度は20%程度である。

こうした市からの補助で行っている教育の成果を、誰かに還元したいという発想から、これらの技能を生かしたボランティア活動も管理している。教育を受けて技能が身についたことをボランティアで活かしたいという人と、技能はなくても身体でボランティアをする人もいる。芸能活動ボランティアなどと同時に各種のボランティアを登録、教育し、ここから各施設や必要なところに派遣している。

ボランティアは自費で行うものなので、貧困のためボランティアの出来ない人もいる。そこは区別しており、もっぱら教育の提供を行う。一般の教養講座に比較して安価なので受講生は応募すると押し寄せるが、ボランティアの出来そうな人を優先して採用している。また、「ボランティアをする人を優先します」と宣言しておく、喜んで参加してくれる人が集まり、お互いのインセンティブになる。ここの登録者は年齢が比較的若い子育て後の40代の主婦が多い。芸術に関しては昨年始めて全体の発表会を行い、家族へのアピールを行った。妻が、母親が何を習っているのかを家族に知らせることにより、さらに家族の協力が得られやすくなるという。彼らは芸術ボランティア団となり、福祉施設や、釜山市に2000箇所ある「憩いの家」といわれる老人施設などの敬老行事に無料で出演している。昨年、福岡で行われたアジアマンスにも参加予定であった。(しかしながら、台風により、渡航できず中止となっている)。



右から、釜山女性文化会館ボランティア担当のSWさん、館長、筆者、芸術ボランティア副館長、釜山大学医学部経営管理学のチョウ先生（会館玄関ホールにて）

芸術ボランティアだけではなく、一般的なボランティアも行っている。「自願奉仕」としてグループで登録し、そのグループを派遣している。現在登録されているボランティアは 49 団体、555 名、活動先は 40 箇所である。センターでは、代表者らと毎月 1 回、活動報告を兼ねた運営委員会として会議や懇親会を行っている。

釜山大学病院にも医療記録の整理や、各種補助、案内、文化活動支援（行事）などを行うボランティアを派遣している。また東南大学病院では、調剤の補助教務をしている。病院ボランティアにかんしては、病院によって事情が違うのでここで全てを教育するのは無理であるが、基本的には 1 ヶ月 6 時間以上ボランティアができ、3 ヶ月以上定期的に活動できる人のみを登録している。病院向けボランティア・サービスの教育も一般的などころを行い、その後派遣先の病院で詳しい教育を受ける。受け入れ先にはボランティア組織の運営規程もあり、専属のボランティア管理者がいる。ここで、申込者の受付、面接、活動希望のすり合わせ、1 日 4 時間の講義などを 7 日間行い一般的な考え方や礼儀などを教育する。これが終了した人を正会員として登録し、「よいボランティアとは」といったボランティア精神について年に 2 回の補習を行っている。登録後 3 ヶ月間の中に打ち合わせやインターン期間を設け、活動現場に即した教育を受ける。病院での入浴介助などは専門的な能力を求められるが、登録奉仕や芸術奉仕、チーム管理などは 49 団体のそれぞれの代表が責任をもって行っている。病院でのボランティアでは、やりたい事とやる事のミスマッチで辞める人もいるという。

芸術活動のなかでも、病院からの依頼で音楽療法のために精神科を訪問することが多いという。ここで行っている芸術活動その他をパンフレットにして配布し広報したことにより、各種施設、団体からボランティア派遣の依頼が増えているという。

92 年より舞踊の指導を始めたが、障害者施設でのボランティアも開始し、女性の社会参加を促している。

すぐれたボランティアには表彰制度もあり、昨年の市長賞は、97 年から継続して幼児福祉施設への配食活動を続けた団体であった。また館長賞は、家族ぐるみで老人施設や病院にご飯のおかずを配るボランティアを行っている家族が選ばれている。これは、ボランティア活動を世代を超えて継続していくために、家族ぐるみでの参加を今後増やしたいということで、この家族を最も評価したという。

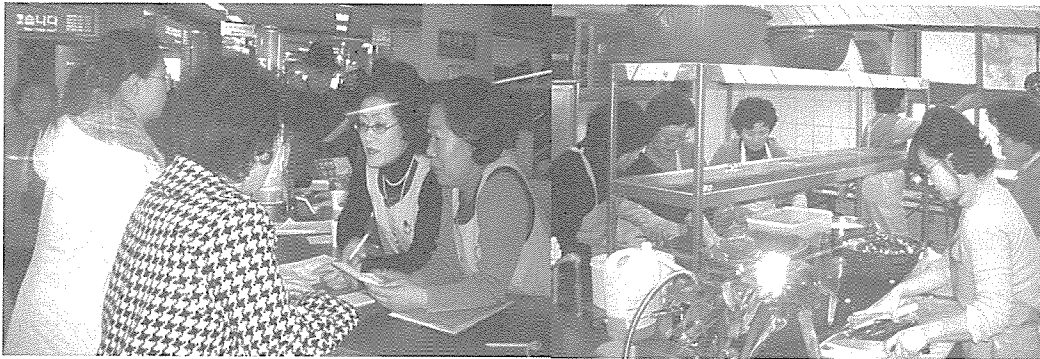
社会事業室には 44 名からなる合唱団が登録しており、49 名のパソコン技術者もいる。色々な施設に出張している。高齢者などで、ボランティア活動が出来ない人には寄付だけを行う「婦女会」というのもあり、現在登録は 90 名で登録者から月に 5 千ウォン頂いている。

各種の相談ボランティアもあり、こうした活動は男性が行うことが多い。ボランティア教育は男性にも実施するが、彼らは主にボランティアの管理を行っている。家庭内暴力の相談などは弁護士などの専門家などもボランティアとして活動している。また韓国在住の外国人女性のための相談ボランティアも

あり、韓国の習慣や子育て、銀行や交通機関の使い方などに関して個別の相談に乗っている。

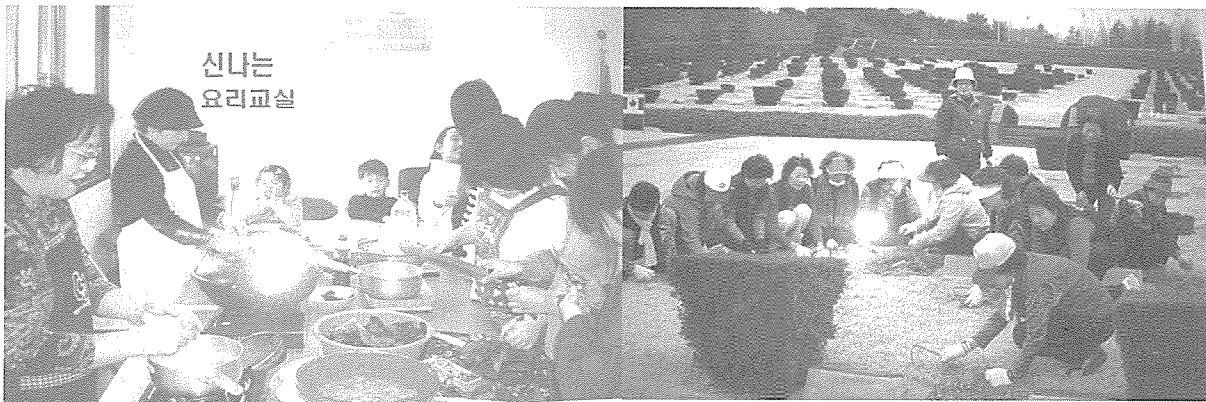
ここで指導しているボランティア活動のうち、生活水準の低い人が入居する老人施設（健康センター）での入浴介助は最も人気のあるボランティアだそうだ。

ボランティア傷害保険には市からの援助があり、大韓火災海上保険が取り扱っている保険に全国でまとめて加入できる。1年以上活動実績のあるひとが加入対象者となり、現在 555 名中 300 名くらいが加入しているが、ボランティア個人で入っている傷害保険と保障内容が重複している場合は個人の保険を使うこともあるそうだ。



外来の患者案内をするボランティア

施設での給食調理ボランティア  
職員と何ら変わりなく働いている



学校に弁当を持ってこられない貧困家庭の子供たちに劣等感を  
持たせないため、学校内の別室に集めて、食事を提供している。  
ボランティアの技術や好みに合わせて観光地の掃除なども行う

現在このセンターでのボランティア担当者は男性職員であり、彼も韓国ボランティア・アカデミーの管理者講習の卒業者であった。前職は市役所で社会福祉課にいたのだが、2004年从这个部署にきて、ボランティアに関する知識がないため、アカデミーでの管理者講習を受けた。大学でもほんの数時間ボランティアに関する講義があり、SWになるためには必須であるが、大学生のときに課題実習としてのボランティアが自分にとっての唯一のボランティア経験だという。しかしながら、この実習や講習が現在非常に役に立っているそうだ。何が一番苦勞しているかと尋ねたところ、ボランティアは女性が多く、微妙な気持ちがよくわからないことで、受け入れ側とボランティア側の対立がよく理解できず、感情的なところを調整するのが難しいという。

現在の問題は、ボランティア活動希望者が多すぎて、活動先を選別すると選ばれなかった人たちが感

情的な不満を持つことである。一方、距離の遠いところなど条件、環境のよくないところはボランティアの希望が少なく、ミスマッチが起きやすいことも問題だそうだ。

このセンターでは、今後家族全体がボランティア活動をするような方向で教育や活動を支えていきたいと抱負を語られた。

## ここで行われているその他のボランティア活動

散髪や託児、独居人の話し相手など各種の活動が行われている。

## 4-4 韓国ボランティア・アカデミー

### 会長 イ・デジュン氏にインタビュー

釜山に本部のある韓国ボランティア・アカデミーは、2002年に福岡にも調査のために来日されたそうだが、残念ながら連携をもてるような適切な団体が日本にはまだ見当たらないと会長のイ・デジュンさんは堪能な日本語で語った。しかしながら阪神淡路大震災以降、日本でも中心的な役割を果たしている大阪ボランティア協会とは姉妹関係を結び、毎年交流を深めているという。

韓国の社会福祉の始まりは朝鮮動乱が勃発し、釜山に避難民が集まってきたとき、外国の支援団体がやってきてこれらの対応をしてくれたことをきっかけに児童福祉の考え方が広まり、“Save the children”というスウェーデンの団体に加入したことからであるという。本来ボランティアは草の根であるということを大切にしており、現在までボランティア協会の本部もソウルではなく釜山に置くことにこだわっているとも言われた。現在協会登録者9千名であり、ボランティア・プログラムを支えるボランティアスタッフは250万人にのぼる。

### 韓国の「ボランティア」

韓国では今日「ボランティア」という言葉は使われない。一般的には「自願奉仕」という言葉を使うそうだ。1950年代は「奉仕」といい、ソーシャルワーク概念の導入後「ボランティア」という言葉が使われるようになり、1970年代までは「ボランティア」という発音を使っていたが、自国の文化背景に合わせたアレンジと一般への普及のために自分たちのオリジナルな言葉を使おうという運動が起こり、ボランティアの韓国的理念を「自願奉仕」という言葉に統一し、自発的で無償の活動にかんする意義の国民的理解を深めたため、現在では「ボランティア」という言葉は使用されないという。

会長は51年間ボランティア活動、研究歴があり「韓国型のボランティアとは何か」などの著書などを記されている。韓国型のボランティア精神はクリスチャンのボランティアが「LOVE」だとすれば、韓国語の「情」(ジョン、なさけ)に一番の価値があるといわれた。1988年ソウルオリンピックをきっかけに韓国国内でもボランティア活動が盛んになっていった。ロスアンゼルス・オリンピックを視察したソウルオリンピック組織委員会の人達が、ロスアンゼルス・オリンピックのボランティアに支えられた運営法に感動し、是非韓国にも同じような自願奉仕を定着させようという運動につながったという。ちなみに、中国でも北京オリンピックを目指して、現在急激にボランティアに関する関心が高まっているという。

さらに韓国では、中学生のボランティア活動義務化が1995年に法案制定され1996年から実施されている。従来の学校教育だけでは人格教育の限界があるとして、人間性を高めることを目的としたボランティア活動が義務付けられた。これは、「学生奉仕」と言われ、「自願奉仕」とは、様相が異なる。この

活動義務時間数は課外特別活動の中に位置づけられ、ボランティア活動を含むその他のクラブ活動などの時間も含まれている。開始当初は年間 64 時間の義務であったが、受験競争の激化などもあり親たちの反対が起こり、40 時間、20 時間と次第に短くなってきたという。現在では年間 10 時間とさらに短くなっている。(しかしながら、ヒヨン医療財団の受け入れている慶尚南道の学校では 6 時間と言われ、地域によって運用の違いもうかがわれた。)

この「学生奉仕」が失敗した理由として、イ会長は以下のように分析した。①義務化したものの現実的な支援制度がなかった、②個人での活動は認められずグループでの活動のみとしたため、受け入れ施設側に歓迎されなかったこと、③そもそも学生にボランティア意識は低く、担当教師や受け入れ施設にもインセンティブがなかったこと、そのため、学生達と教師が海岸で漫然とゴミを拾って時間つぶしをするなど、あまり教育的効果が認められなかったことなどを指摘された。これらの失敗を乗り越えるためには、学生個人の本当にやりたいことを見つけさせて、取り組ませることや活動を指導する教師にもマネージメント手法の提供を始め、受け入れ側に対してもきめ細かな支援体制を準備することなどが重要であるという。今後「学生奉仕」に関しては、点数制で評価するという義務を止め、きちんと制度化し価値を教えられるような体制を作ることが必要とも指摘されていた。ボランティアは本来心からやりたい気持ち「自願」が重要である。

韓国のボランティア活動の分類には「社会奉仕」というものもあり、これも「学生奉仕」同様、純粋に自発的とは言えない無償の活動である。犯罪者の保護観察の一環で行われ、比較的罪の軽い者に対して刑務所ではなくて、一定期間福祉施設での奉仕活動をさせるもので「社会奉仕命令制度」に基づいて行われている。実際にヒヨン医療財団ではこうした人たちも受け入れていた。

このように、ボランティアという概念を自発性と無償性それぞれの意味づけから 3 つに分類し、言葉を使い分けることで受け入れる側も活動する側もニュアンスの違うそれぞれのボランティア概念を理解することが可能になっている。

「自願奉仕」がもっとも一般のボランティアにあたり、韓国では有料ボランティアというのはいないという。お金をもらおうとそれを期待するようになり、払う方もどの程度支払うかという経済的評価の問題も出てくるため、お互いにネガティブな効果が出がちである。もし、金銭的な対応をするにしても少しだけ支払うなどリーダーがその効果を知って対応しなければならない。しかし、ここでもアメリカ型のボランティア・マネージメントが例に出され、活動時間はボランティアの労働時間の寄付であると認識から、活動のために必要な実費を支払うことは合理的であるという。

韓国でのボランティアは基本的に 1 日 4 時間以内、看護師の資格のあるものや中学生などもその規程の対象となる。これは労働者との違いを明確にするためである。これもアメリカ型ボランティア観と同じである。

活動が長続きしないのは本人の気持ちの問題と、無理をするせいであり、自分の生活を犠牲にするような活動はよくないという。ボランティアは自己開発のための活動であり、人にサービスするだけでなく、自分にも価値のあるような相互性が求められる。こうしたことをボランティアにも徹底的に教育し、ボランティアの意味や価値を知ってもらうことが重要であり、ボランティアが医療機関などにいることで病院の変化や患者への影響も生まれると考えている。

韓国では全人口の 20.5%が何らかのボランティア活動をしており、2005 年の統計では社会福祉施設でのボランティアが最多となっている。活動者は女性が多いが、企業のフィランソフィー（企業の社会貢献）の考え方も普及し、サムソンなど有名企業に関してもボランティア精神教育などを支援している。釜山にはサムソンの従業員 5 千人がおり、既に 3 千人に対して教育を行ったという。フィランソロ

フィーにより、企業自体からの寄付だけではなく、企業内の人事評価でもボランティア活動を評価する点数などがあり、従業員個人が各種のボランティアをすることを推奨されている。また、学校は週休5日制であるので空いた時間をいかにボランティアにひきつけるかということも課題である。

イ会長は、ボランティア精神を真に理解させるには、幼稚園くらいから取り組むべきだと考えている。そうすれば自然にできるようになるという。大学でも40時間のボランティア活動を義務付けているところもある。高校は義務ではないが、受験の際に参考にされるそうだ。

2006年8月韓国では、ボランティア基本法の制定が行われた。ボランティア団体が多くなってきたことや世界的潮流としてボランティアが盛んになってきたためである。ボランティアは時間が余っている人のやることではなく、地域づくりにボランティアが欠かせないという認識から地域のボランティアセンターに対して、財政的支援や専門のコーディネーターの設置などを法制化した。これは公聴会など、ボランティア協会の10年以上続けたロビーイングの成果でもある。

## ボランティアセンター

現在韓国では各市、都にボランティアセンターが設置され、釜山広域市と周辺の16の区（市）に16のセンターがある。自治体、政府から予算化した財政的支援を受け、センターも法人化された。企業や個人からの寄付も受けるようになった。センターの規模は所長を含めて平均3名程度の職員で運営されるが、10名のところもあるそうだ。センターでは、地域総合プログラムの提供をしている。ボランティアの募集、送迎、提案、教育、などを行い、交付金が使われる。今年からセンターにはコーディネーターを置くことが義務付けられるようになり人件費や運営費もつくようになったという。ボランティア保険は一つのセンターで5千万円くらい提供している。ボランティアは仕事ではないので、1年間の活動実績があるものだけを加入対象としているが、保険の対象となる活動は老人に関するもの、地域活動、青少年問題、講習や行事などが含まれ、傷害保険として扱っている。

## ボランティア管理士認定コース

韓国での認定コースは1999年から開始し、テキストはアメリカボランティア協会のものを翻訳したものを使用し、施設見学やワークショップ、実践活動、レポート提出などが盛り込まれている。セルフアセスメントシートでは自己の到達点を確認し、受講の前後で比較させたりもする。

管理士にも段階があり、コーディネーターはボランティアのグループリーダーなどとの交渉など、中間管理職的立場であり、マネージャーは全体の管理をするさらに上位の資格であると位置づけている。これもアメリカのコーディネーター、ディレクターに準じた扱いである。ボランティア・コーディネーターのコースは、ボランティアコース（実際にボランティア体験をする）を終了した人のみを対象とし、これらのコースに関しては同様のコースをフィリピン、香港、シンガポールなどのボランティア協会と提携しているという。

「ボランティア管理士」の資格認定については、アカデミーでマネジメント教育を行うが、受講資格としてはボランティア活動500時間以上の実績があり、SWや学校教師などボランティア管理に責任のある者を対象とし、3ヶ月間の課程修了で認定している。既に約700名の卒業生を輩出しており、各種団体、施設などで活動しているという。ボランティア活動の活性化のためにはプロフェッショナルなマネージャーが必要であると考えた会長がアメリカのボランティア協会に学び、正式にアメリカボランティア協会の認定を受けたうえで、ボランティア管理士コースを韓国で開始することになったそうだ。しかしながら、未だボランティア管理の専門職の必要性について一般に認識が薄いとも言っておられた。



アメリカボランティア協会の認定コースでは、リーダーシップの問題などもあるので講師と1対1で教えるスタイルだったそうだが、韓国では講習会スタイルにしており、1回に40名を受け付けている。マネージャーコースに関しては、アメリカでは博士課程と同様に厳しいので、韓国では教え方の工夫が必要と考えている。受講者は、退職後ボランティアセンターで長くボランティアをしていた人なども含まれている。

ボランティア活動が上手く根付くには、どういう人がボランティアをマネジメントするかが大切であり、組織でのボランティア活動活性化のためには、職員とボランティアのコーディネーションが重要である。そのためには組織の最高責任者がボランティアやそのマネジメントに関してきちんと理解していることが大切であると言う。

会長自身かつて病院でのボランティア・コーディネーターの経験があるそうだが、院長はボランティア導入に熱心であったが、他の職員、とりわけ看護師長の理解が得られず、職員の温かみのない対応がボランティア達に知らず知らずのうちに伝わり、結局上手くいかなかったという。ここでも職員に対する徹底した教育が重要であると言われた。組織の最高管理責任者をはじめ、全職員がボランティアの価値を理解することが必要であり、必要な物品の準備や、適切なプログラムの提供など専門的なマネジメントが重要である。こうして韓国ボランティア・アカデミーで提供される医療福祉施設でのボランティア・マネジメントは、アメリカ型のマネジメントスタイルをほぼそのまま取り入れたようで、*job description* という言葉も使われた。

「ボランティアは仕事を楽にするのではなく、仕事を拡張する人である」と伊会長が発言したが、これは日本病院ボランティア協会でも全く同じことを言われ、偶然か情報共有したためか、不明だが同じ発想にいたるところが興味深い。

ボランティアに対するニーズは、韓国でも老人問題、少子高齢化、病院の経営など社会状況の変化に応じて高まっている。アカデミーでは、ボランティアの教育、コーディネーターの教育、大学生のボランティアリーダーシップ、青少年ボランティア大使プログラムなどを提供している。国際青少年ボランティア交流事業として、日本の大阪池田市から修理した中古車椅子17台を釜山の障害者施設に譲り受け、その施設での活動を含め日本の若者を受け入れる3泊4日のプログラムも実施している。

退職者ボランティアは、経験上余り期待できないと伊会長は言う。退職すると遊ぼうと考えている人が多い。大阪でもマスターオブカレッジという高齢者向き講座をやっているが、余り人が来ないという。日本や韓国ではボランティアを幼少時から体験していないので、年を取ってから改めてボランティアというものに興味を持つのは難しいという。東洋では、人を助ける心は西洋よりさらにあつたと思うが、オリンピック委員会や伊会長らのアメリカでの体験から、それが間違いであることに気付いたという。韓国が失いかけている「情」をどのようにして取り戻すかと考えたとき、ボランティア活動体験やその教育が重要であるということになったそう。近年、韓国でも核家族化がすすみ、敬老精神が失われつつあるという。韓国でも道徳の授業があるが、教師自身が理解していないこともあり、十分に機能していない。道徳心や公共心、奉仕、孝行などの気持ちを国民に持たせるには、幼少時からの高齢者との自然なかかわりやボランティア体験が必要だと伊会長は考えているそう。そのための活動をする機会を積極的に提供することや、それらの活動を指導する人たちに適切な情報を与えることが重要であると考え、こうした具体的マネジメント法をもつ専門職の確立を目指しているという。

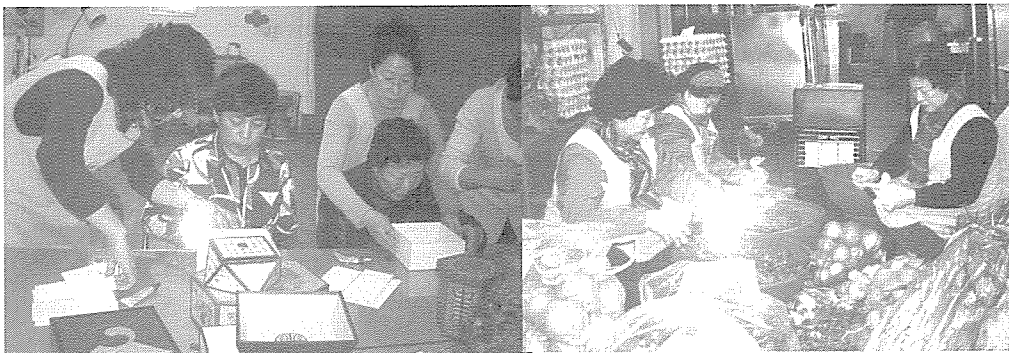
会長の見た日本のボランティアは、ボランティアセンターの位置づけなどに関しても社会福祉協議会

の中にあるなど行政主導の社会福祉の中に含まれており、独立しておらず、あまりにも行政との距離が近いと指摘する。マネージャーの専門職化について、日本では阪神淡路大震災のときに各地から集まったボランティア・マネジメント手法が確立されておらず、十分なボランティアの活用が出来なかった体験からその必要性が認識されるようになってきたが、具体的なボランティア・マネジメントに関する組織的国家的取り組みは行われていない。災害ボランティアや地域活動におけるボランティア・コーディネーターについての認識は高まってきたが、医療機関や福祉施設における専任ボランティア・コーディネーターについての認識や理解は不十分である。資格認定やテキスト・マニュアルの整備、提供も充分ではない。

日本にかんしては、まだ全国的にパートナーとなる団体がなく、大阪ボランティア協会と交流を深めているところであるが、今後日本にも韓国ボランティア・アカデミーと交流を持つ機関を見つけたいとのことであった。さらに、ボランティア精神をいかに福祉教育に結び付けていくかも、今後の日本の課題であるともいう。

韓国ボランティア・アカデミーは既にフィリピン、香港、シンガポールなどのボランティア協会と提携していると前述したが、中国に関しても、縁のあるボランティア団体（赤十字社）などとは連携を図りつつあるが、まだパートナーとなる明確な受け入れ先がないという。

今回の調査でアメリカ型ボランティア・マネジメントが韓国を始め、多くの東アジア諸国で共有されつつあることがうかがわれた。



施設でのリハビリのお手伝い

それぞれの家庭で配食の準備をする



独居老人宅への配食を行うボランティア

外国人女性にパソコンを教える

参考：韓国のボランティア活動 新聞記事より

韓国のボランティア活動の現状を新聞記事より検証してみる。

#### ボランティア活動も「二極化」

釜山日報 2006.12.30

年末年始を迎え、福祉館や療養院などの比較的大規模な施設にはボランティアが殺到する反面、小規模ボランティア団体には人が集まらず人手不足になるなど、ボランティア活動でも二極化が進んでいる。

釜山の A 総合福祉館では、毎週 30 人余りの固定のボランティアスタッフが週 1～2 回のボランティア活動を行っている。その上、常に近隣の生徒や住民が訪れては福祉館内のプログラム進行などを手伝っている。B 福祉館ではボランティアが増えすぎたため生徒と主婦などに分けて交代制にし、各ボランティアに合ったプログラムに配置しているほどだ。G 老人療養院では、固定のボランティアスタッフが毎月約 300 人を超えている。これらの団体はいずれも「ボランティア不足で困ることはない」と話している。

これとは対照的に、施設が整っていない小規模ボランティア団体では、ボランティアスタッフ不足に嘆いて入る。15 人のホームレスが集まって共同生活を営んでいる「復活の家」は、5 か月間も台風で壊れた 20 坪余りの住宅工事を自分たちの手で行いながら、他のホームレスらに朝食を提供するボランティア活動を行っている。猫の手も借りたいほどの状況だが、現在ボランティアは 2 人しかいない。

作業場を構えて低所得層の住宅修理と壁紙の張替えを行っている「幸せを作る人」では、今年 1 年間ボランティアを募集したが、希望者は 1 人もいなかった。代わりに社会奉仕命令の対象者がボランティア活動を行ってきたが、先月末から彼らの支援も途絶えてしまった。そのため、個人的なツテを頼ってボランティアを探し回っている。

このようなボランティアの偏りは、大きな団体は認知度も高く交通の便が良い反面、小規模団体は知名度や信頼度が低いことに起因する。実際にボランティアセンターでも、検証済みの大型施設を中心にボランティアを支援している。あるボランティアセンターの関係者は、「個人ではないボランティア団体が公文書を送れば、それを検討してボランティアを派遣できる。だが、直接現場に足を運んで団体の活動を調査するのは容易で

はない為、信頼度が高い施設を中心にボランティアを派遣することになる」と述べた。

問題は、このような現象が持続することで大規模ボランティア団体は益々大きくなる一方で、小規模ながら自発的な「草の根型ボランティアの会」は寿命が短いという悪循環が繰り返されていることだ。

この問題について「復活の家」の代表者キム・ホンスル牧師は、「規模が小さいという理由だけで、団体の実態を怪しまれることもある。しかし、国の認定が必要なのはボランティア活動の内容だ」と強調した。官庁では、ボランティアが集中する大型団体よりも小規模ボランティア団体の活動を把握して、その内容が良ければ認証と支援を行い、一般人からの信頼度を高める必要がある。

김백상기자 k103@busanilbo.com

キム・ベクサン記者

#### 参考：韓国芸能人のボランティア活動

韓国では、企業や芸能人、スポーツ選手などが活発なボランティア活動を行っており、それらが報道でしばしば取り上げられている。こうした有名人の活動が一般人のボランティア活動に対するイメージの向上やモチベーションに影響している可能性がある。

以下に示すのは、ほんの一例である。

#### 芸能人ボランティア団体が釜山にレストランオープン

朝鮮日報 STARNEWS 2005.09.23

芸能人ボランティア団体「タサモ」(温かい人々の集まり)の会員タレント 24 人が 23 日、釜山(プサン)海雲台(ヘウンデ)区に「タサモ・レストラン」をオープンする。

張東健(チャン・ドンゴン)、車太鉞(チャ・テヒョン)、チャン・ジニョン、キム・ウオニラスケジュールの都合がつかない 6 人を除いた安在旭(アン・ジェウク)、キム・ミンソン、キム・ソナ、キム・ミンジョン、鄭俊浩(ジョン・ジュノ)、チョン・ソンギョン、パク・ソニョン、パク・チニ、ユジン、エリック、Kangta ら 18 人のスターはこの日、タサモ・レストランのオープン記者会見に出席する。

ある篤志家の寄付で 10 月 5 日に正式オープンする「タサ

モ・レストラン」の収益金の全額は、釜山地域 163 中学校で推薦を受けた少年少女家長(保護者がおらず未成年者が世帯主となっている家庭)の奨学金として支給される。この日に開かれるオープン会見にも 20 人の少年少女家長が出席し、海雲台区にある児童福祉施設「恩恵の家」との姉妹提携も予定されている。

また 24 人のスターは一月に一度、このレストランで直接フロアに立ってサービスをする予定だ。また、今後も 2~3 か所の直営店を運営する計画もあるという。

タサモの事務局長を務めるウィナープロダクションのアン・ジュンソク代表は 22 日、「芸能人がボランティア活動をすると言っても多くが企業や個人に資金や物資を伝達する媒介的な役割を主にしてきたが、タサモはスターが直接奉仕やボランティア活動に参加するという点で非常に意味が大きい」と話した。

2002 年に設立されたタサモは、スターが直接基金を集めて今までに約 50 人の少年少女家長を支援してきた。2004 年に社団法人設立後、同年 8 月に財政部の認可を受け、正式に寄付団体として活動している。

朝鮮日報 2005.11.23

BC カードが高齢者とホームレスの無料給食のため「赤い食事カー」2 台を社会福祉機関に無償で寄贈、23 日午前、ソウル・馬場(マジャン)洞の高齢者総合福祉館で BC カードの広告モデルソン・ヘギョが高齢者を対象に無料給食を配るボランティアをし teiru.

Battle、Eddie、イ・イエリン、Lyn、体験ボランティアの現場 朝鮮日報 2007/02/17

イ・ビョンジン、イ・イエリン、Lyn(リン)、Battle(バトル)、Eddie(エディ)が、京畿楊平の児童保育施設『信望院』の一日ボランティアに参加した。普段から社会ボランティアに関心が高い彼ら芸能人が、KBS1TV『体験、生きる現場』に出演する形式で行われた。

先月 31 日に信望院を訪問した彼らは、院の子供たち 40 名余りのためにトイレ修理、倉庫整理、お正月料理の準備、お風呂に入れたりなど、大粒の汗を流した。グループ“Battle”は、訪問に先立ち、1 週間前からマジックを習ったりもした。また、イ・チャンミョンとチャーリー・パクも、7 日ソウル九老洞“外国人労働者の家”を訪問。異国で寂しくお正月を迎える外国人労働者と特別な一日を送った。[写真=NEWSIS]

チェ・ジウ、誕生日にボランティア活動 朝鮮日報

2005.6.12

「顔もかわいいが、心はもっと美しい」。「ジウ姫」が誕生日を記念して善行を実践した。

チェ・ジウは 11 日、ソウル鍾路区(チョンログ)鍾路 3 街の宗廟(チョンミョ)公園で 30 歳の誕生日を迎え、ファンクラブ会員らと一緒に、お年寄りに小さな愛の手を差し伸べた。チェ・ジウは、生活に困っているお年寄りに食事を配るなど、意味深い誕生日を送った。

この日、チェ・ジウの国内ファンだけでなく、日本人ファンもボランティア活動に参加した。チェ・ジウとファンらの善行は一時的なものではなく、チェ・ジウのファンが自発的に実行している「小さな愛実践」運動の一環。この「小さな愛実践」運動はすでに 40 回目を超えている。

チェ・ジウはこの日、ボランティア活動を終えた後、国内・日本ファンクラブ会員らと一緒にケーキカットをするなど、幸せな誕生日を過ごした。



参考：韓国社会のボランティアや寄付行為に関する意識

【7月 25 日】有意義な夏休み

朝鮮日報 2006.07.25

一日はボランティアで水害の被災者を助け

「働くのって楽しいだろ？」

二日間は思いっきり遊ぶ

「うわー、江原道の海水浴場って広～いね！」

今年の夏はこんな風に過ごそう。

韓国の成人男女 52% 「1 回以上寄付」

朝鮮日報 2002.11.20